

第1章 戦場

東南アジア各地における戦い

民間人の南方戦線

佐藤幸吉さんのお話から

○歩兵 陸軍で、小銃・機関銃・擲弾筒（てきだんとう）などの小火器を装備し、徒歩で戦闘を行う兵。

○幹部 軍隊で将校・下士官のこと。

○アツ島 表紙裏地図

○玉砕 玉のように美しくだけ散ること。全力で戦い、潔く死ぬこと。当時は、それが名誉・忠節を守ることとされた。

○シンガポール 表紙裏地図

○駆逐艦 海軍艦船の一種。小型で速力が速い。警戒・護衛・奇襲攻撃を行う。

私が二十歳の昭和十六年（一九四一年）五月、当時小樽の三菱商事に勤務していたのですが、召集令状がきて盛岡の部隊に入隊しました。軍では歩兵科に配属されました。毎日徹底的に厳しく教育されました。

ある日のこと、突然ラツパが鳴り完全武装をして兵舎前に整列させられました。部隊が、アツ島に派兵されることになったのです。部隊では当時、優秀な成績をとると幹部候補生の資格を取ることができ、私はその時、たまたま試験のために数少ない留守部隊として盛岡に残されることとなりました。結局、そのままアツ島に行かないまま、召集解除を命じられたのです。これは私の幸運、運命の分かれ目だったと言えます。部隊はその後、アツ島で玉砕したのです。

昭和十八年、再び三菱商事につとめていた私は、転勤でシンガポールに行くように命じられました。まずは会社で研修期間として、インドネシア人からマレー語を教育されました。英語と全然違うのでとても苦勞しました。

シンガポールへは博多港から二十四隻の輸送船団で出発しました。台湾の高雄で給油を行い、次の寄港地マニラ港を目指しました。その頃は戦争が相当激しくなっていた時期でした。中間地点にあるバシー海峡は特に「魔の海峡」と呼ばれ、潜水艦の魚雷攻撃によりたくさん船が沈められた海域です。昼間は駆逐艦や水上飛行機で警戒しているので攻撃は受けられないのですが、夜になり視界がきかなくなると駆逐艦等は引き揚げてしまい、大変危険な状況となりま

○インドネシア
地図
表紙裏

した。

案の定、アメリカの潜水艦の魚雷攻撃を受け、真つ暗な夜の海で他の船からもすごい火柱が上がったのを覚えていきます。船はねらわれないようにすべて消灯しました。朝になって見ると、二十四隻で海峡に入ったのが、マニラ湾には九隻しか残っていませんでした。船長の操舵で魚雷からうまく逃げた船は大丈夫だったようです。しかし、撃沈を逃れたといっても私が乗っていた船は銃撃で穴だらけでした。

運良く私たちの船は、なんとか目的地のシンガポールにたどり着きました。そのころシンガポールは昭南島と呼ばれていました。元はイギリス領で、当時は日本が占領していました。シンガポールに着いて数か月後に、今度はインドネシアのスマトラ島に転勤を命じられました。

インドネシアは元オランダ領で白人が支配していました。当時はここも日本が占領していました。インドネシアでは日本



イメージ図

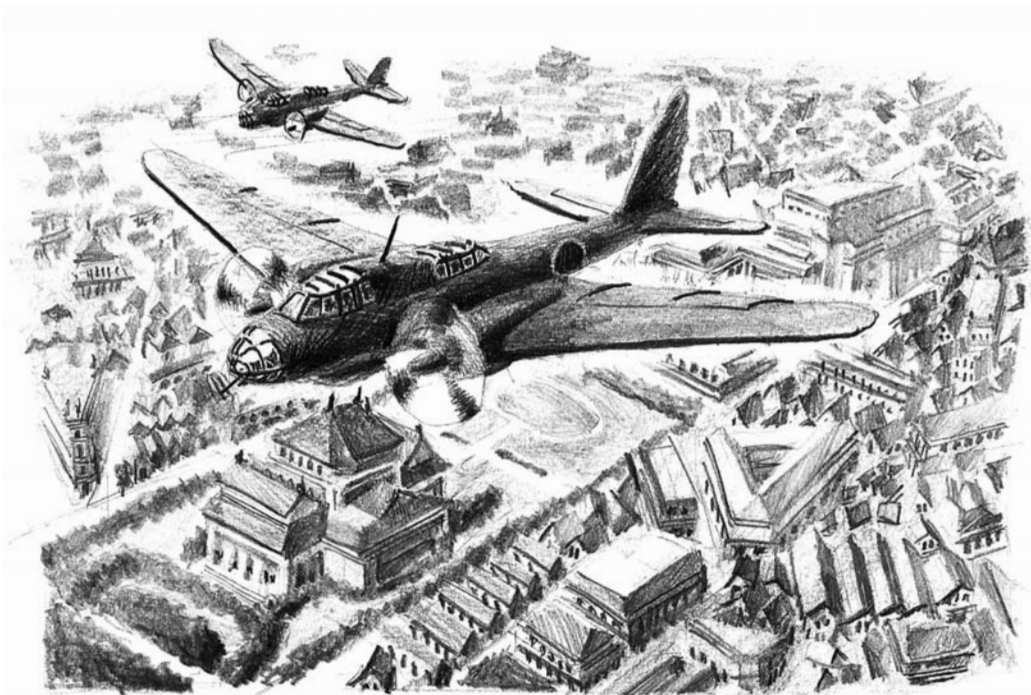
イギリス領マレーのクアラルンプールを攻撃する日本軍

○鉄条網 有刺鉄線を網のように張りめぐらしたもの。

人は別格の扱いであり、住む場所も危害を加えられないように鉄条網で囲われていたり、ガードマンも必ずついていたりしました。特に日本から来た官僚に関しては待遇がよかったです。インドネシアでは、私は戦闘員ではなく民間人でしたが、軍隊の教育を受けていたので二回ほど召集がきました。現地召集と言われるものです。

当時、インドネシアには日本のような義務教育はなく、お金のある人しか教育を受けることができませんでした。私は日本軍から教育を受けていない住民のために、勉強を教えてほしいと頼まれました。何を教えるかと考え、世界共通の音楽を教えることにしたのです。教えた曲は日本語の歌です。

現地の人たちは、ずっとオランダの白人に植民地支配され、苦しんでいたということもあり、日本人が行くと平和のために来たとしても歓迎してくれました。そういうこともあり、会社の仕事の合間にヤシの葉でできた寺子屋みたいなところで教えるのですが、それが表彰されるぐらい成功しました。



イメージ図

シンガポール上空を飛行する日本軍の爆撃機

○抑留 国際法上、他国の人や物、特に船舶を自国の権力内に置くこと。

終戦となり、私たち民間人も連合軍に抑留されました。昭和二十一年までインドネシア、シンガポール等三か所で抑留生活を送りました。なかでも、インドネシアのパレンバン抑留所からシンガポールの抑留所へ移動させられたときのできごとは今でも悲しく、痛ましく、辛くなります。シンガポール上陸後、炎天下の中を徒歩で抑留所へ「死の行進」をさせられました。暑さ、のどの渇き、疲れ果てた私たちの行進の両側を、自動小銃を構えた兵隊ががちりガードしています。途中で倒れた者は、そのままにされてしまいます。敗者の哀れさが浮かんできます。私は当時若く、多少体力もありましたので、年輩者の荷物を両肩いっばいに担ぎ、手助けして大変感謝された記憶があります。

幸い私の抑留生活は、物資がイギリスから支給され、米など欲しいものがあれば言うだけでいいこと、不自由なことは特にありませんでした。ただ日本からの情報は非常に乏しく、手紙が届かないことはもちろんでしたが、実は、終戦の日も知らないほどでした。ほかの抑留所では、満足な物資もなく、自給自足を強いられ、たいへんな思いをしたところもあったようです。

最後に、戦争は二度と起こしてはならないと誓いたいのです。

DATA

平成20年度西区平和事業

聴き取り

- ・平成20年7月23日
- ・西区役所



佐藤幸吉(さとう・こうきち)さん

- ・大正10年(1921年)生まれ
- ・札幌市西区在住